

ウイルス性肝炎

「ウイルス性肝炎」とは A ～ E のウイルスの感染によっておこる肝臓の病気です。

A 型、E 型肝炎ウイルスは主に食べ物を介して感染し、B 型、C 型、D 型は血液を介して感染します。肝炎が進行したのちに肝がんと診断された約 7 ～ 9 割はこれらのウイルスが原因となっています。

特に B 型、C 型肝炎ウイルスについては、感染すると慢性の肝臓病を引き起こす原因ともなります。

肝炎になると、肝臓の細胞が壊れて、肝臓の働きが悪くなります。一部では、倦怠感、食欲不振、吐き気、黄疸（皮膚が黄色くなること）などの症状が出るがありますが、全く症状が出ないことも少なくありません。



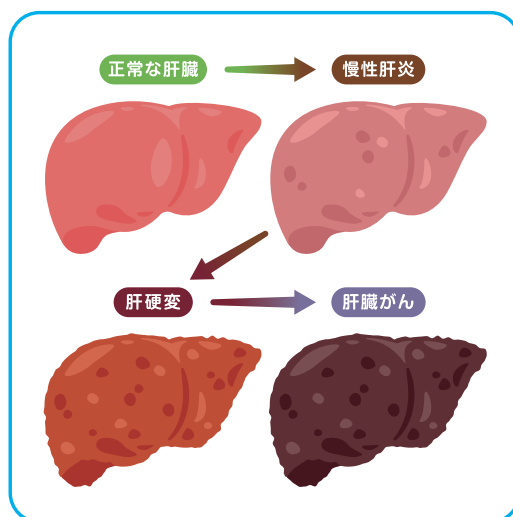
■ウイルス性肝炎とは

- ウイルス性肝炎はウイルス感染が原因で起こるといっても、感染経路が血液を介するため、日常生活で感染が広まることはほとんどありません。感染者の血液や分泌物へ接触をしないようにすることで他者への感染を防ぐことができます。
- B 型、C 型肝炎は慢性的な肝炎を引き起こします。一部の人は急性肝炎を発症することもあります。症状が出ないまま慢性化して肝硬変や肝がんになる可能性があります。
- ウイルス性肝炎にかかっている場合、通常の健康診断ではわからない場合がほとんどです。一度も検査を受けていない方は、B 型・C 型の検査を受けるとよいでしょう。



■肝炎ウイルス検査について

- 肝炎ウイルスは感染していても自分では気が付きにくく、感染した状態のまま放置していれば肝硬変や肝がんが進行して重篤な状態になることもあります。
- 保健所及び一部自治体が委託している医療機関であれば肝炎ウイルス検査を無料で検査を受けることができます。
- 一部自治体では、ウイルス検査後の精密検査にも費用の一部を助成されることもあります。



■B型肝炎

- B型急性肝炎の場合、感染して1～6か月の潜伏期間を経て症状がで始めます。肝炎の程度が軽いと自然と治癒した症例もありますが、中には劇症肝炎となり生命にかかわる状態になることもあります。
- 出産時あるいは乳児期にB型肝炎ウイルスに感染すると、うまく免疫が作用せず持続的に感染が続いてしまう状態（持続感染）に移行します。感染後数年～数十年間は肝炎が起きず、感染したHBVは排除されずに体内で共存しており、この状態を無症候性キャリアと言います。思春期以降、自己免疫が発達することで一過性に強い肝炎を起こします。その後8～9割は肝機能が安定しますが、1～2割の人は肝炎が持続し、慢性肝炎となる場合があります。

■C型肝炎

- HCVに感染するとごくまれに2～14週間の潜伏期間を経て急性肝炎を引き起こすことがありますが、多くの場合症状で出現しない「不顕性感染」となります。そのうち6～8割はウイルスが体内から除去されず、慢性肝炎へと移行します。さらにこのうち3～4割の方が約20年経過し、肝硬変へ進行します。
- 肝硬変が進行すると、肝不全となり生命にかかわる状態になってしまいます。

■B型肝炎・C型肝炎の感染予防について

B型肝炎の予防には3つの母子感染対策・ワクチン接種の施策があります。

HBV 母子感染予防対策事業



母親と新生児に対しての予防事業となります。

医療従事者などに対する ワクチン接種



感染リスクの高い人に対して複数回ワクチン接種します。

HB ワクチンの定期接種化



2016年4月1日以降に生まれた全ての0歳児に限りワクチン接種を3回公費で受けることができます。

C型肝炎の予防にはHCV感染予防のためのワクチンができていないため、感染予防のためには他人の血液に触れないことが重要となります。